



第186號 (第 16 卷)

(昭和11年) 10 月 號

## 用語のまちまち

(巻 頭)

先日、或る航海學の書物を見たところ、吾々の用ふる天文用語よりも非常に異なつた用語が用ゐられてゐるのに一驚を喫した。

今日、我が國の天文學者間に用ゐられる學術用語には多少の不統一がある。(尤も、これは天文學以外の、他の理學に於ける用語の不統一ほど、ひどいものではない。天文學では全用語の95%までは統一されてゐるのだから、餘り神經過敏に之れを氣に病む 必要はないのだが。)ところが、天文學は、他の多くの學術にも交渉や關係が深いから、天文學者以外の學者や技術者たちも、止むを得ず、多くの天文用語を用ゐる。しかしながら、天文學者相互の間に用語の統一がないくらゐだから、他の學者たちと天文學者との間にも、一般に何の連絡が無いのは勿論であつて、従つて、用語は各自皆勝手になつてゐる。全く、西洋あたりには見られないことである。試みに、氣象學、航海學、航空學、測量學、物理學、數學、光學器械、曆學、易學、哲學、宗教、潮汐學、電氣學、無線通信術、地理學、地質學、礦物學、力學、海洋學、地磁氣學など、みな此うした天文關係の學術書を播いて見るならば、同じ原語に相當する邦譯語が、如何にまちまちであるかに驚かぬ人はない。どうしても西洋語なしには意味の通じない場合もある。例へば、或る人は“隆角”といふ語を平氣で用ゐてゐるが、讀者よ、之れをそもそも何の意味と解せられるか?! 之れは實は Prominence 即ち紅焰のことなのだ。

どうしても、吾々は、常にやかましく叫んでゐる如く、先づ天文學者間の用語の統一を圖り、其の決定を待つて、天文家以外の人々が用ゐる天文用語を導かねばならない。故に“天文用語委員會”の設立が1日も早く望ましい。(山本)